

# おが粉が高騰 畜産しわ寄せ

牛などの畜舎の床に敷くおが粉（おがくず）が高騰し、鹿児島県内の畜産農家の経営を圧迫している。大量の丸太が木質バイオマス発電所の燃料に使われ、供給量が減少しているためだ。おが粉はふん尿を吸着し、堆肥作りにも有効な資材。木質バイオマス発電が林業の活性化に一役買っている反面、畜産農家にしわ寄せがきている。

おが粉1立方メートルの取と協通吉社長。「この売価格を2014年4月に2千円から2100円に値上げ。15年2月に3千円にした。この2年で、丸太の仕入れ値が倍近い1立方メートル7千〜8千円に上がり、値上げなしには採算が合わなくなった。

原料となる丸太は間伐材などの低質材。中国への輸出が増えたことに加え、昨年稼働した霧島木質発電・燃料（霧島市）、中越パルプ工業川内工場（薩摩川内市）のバイオマス発電で相場は急伸した。資源の有効活用に注目度も高い。

「子牛も飼料も何もかも高くなった。和牛子牛を購入して肉用に育てる小田畜産（南さつま市）の小田雄二郎社長は困り顔だ。3400頭と多頭数を飼養し、購入するおが粉は月600立方メートル。経費はばかにならず、おが粉の入れ替え回数を減らす一方、乾燥させた牛ふん堆肥におが粉を混ぜる「戻し堆肥」で使用量を抑える。

ただ、量を減らすことで牛が滑ってけがをしないか不安もある。「ペレット状の輸入品もあると聞くが、口蹄疫が心配で使えない」

遠藤さんは「おが粉は製造する側と農家が個々に取引しており、価格や需給状況がなかなか見えてこない。行政が音頭を取り、地域ごとに製造側と農家が情報共有して需給調整したり、双方が出資して共同販売する機関を設けたりするなど、共存共栄できる対策を取らないと解決しない」と話す。（小野智弘）

「畜産業界もきついが、われわれも同じ」。10年以上前からおが粉を製造販売する東木材（枕崎市）の宮崎俊輔取締役は話す。

## ■5割高

畜舎床敷き  
ふん尿吸着

## 木質バイオオで需給変化

3千円で販売しているが新規の申し込みは断っている。「原料がそろわない。高く売れば農家を苦しめることになり、長い付き合いの農家を大切にしたい」

両発電所に必要な燃料は年間計40万立方メートルと膨大だ。1ト（約1

立方メートル）7千円で買取る霧島木質発電には、霧島市が年1億200万円を補助している。丸太が集まるよう、買い取り価格の一部財源に充てられている。

## ■節約

畜舎の敷料にはもともと、もみ殻が重宝され、シラスも使われてきた。おが粉高騰の影響を受けていないのが種子島や奄美で、サトウキビの搾りかす「バカス」などが活用されている。

## ■共存共栄

県畜産課の佐々木幸良課長は「もみ殻や稲わらで代替できるが、